

インタビュ

船場 上席執行役員



神戸 暁氏

なったオフィスの机や椅子などの多くは、廃棄物として処理されていることが多いですね。リサイクルするにしても分解作業などを考えると手間がかかります。こういった不要となったものを、必要としている人につなげたいと感じたことがきっかけです。

また資源循環を含め、未来に優しいエンジニアリングと施工を行うことを当社のミッションとしており、会社全体の取り組みとして部署を横断した推進チームを進めています。

もちろん企業ですから、経済的なリユースを追求することも重要なわけで、両立できるポイントを探すことが大切です。

現在現場からの廃棄物について、一次リサイクル率94%を達成しています。一次リサイクル率とは、当社独自の指標で、現場で出た全廃棄物のうち、リサイクルできる状態の中間処理場での最終

内装施工でリサイクル率94%達成 施工、解体、中間処理の連携で

リサイクル率が大きく下がってしまったため、解体時にそのまま壊すのではなく、混合廃棄物とならないよう分解しながら解体し、素材ごとにばらすことが大切でした。

当社では、事前に解体業者や中間処理業者だけでなく、現場で作業する多くの職人たちと綿密にコミュニケーションを取り、お互い協力していく体制をつくっています。

最も高いリサイクル率を算出した取り組みでは、中間処理場以降までトレースした最終リサイクル率で100%を達成しました。この経験から、現場で何品目の分別が最適なのか、リサイクルのインパクトの大きい品目は

何なのか、コストの分岐点など、多くの協力してくれるパートナーと対話を重ね現在の体制を作りました。

——具体的にどのような取り組みなのか教えてください。

神戸 一言で言うところではないからだと思います。私のキャリア

は設計職が長かったの域それぞれの現場の状況や工事の条件など異なるため、臨機応変であり、今後はいったん取り組みが競合優位性にもつながっていくと考えています。

そして設計施工を行っている当社の強みを生かし、リサイクルされた資源を使ったり、新築に重要なと考えています。

また、この思いに共感いただく多くの企業をつなぐような取り組みを進めていきたいですね。われわれがこの仕組みを作ると、たくさんの方の企業がサーキュラーエコノミーに貢献できると思っています。このことから、排出のデファクトスタンダードは2032年には200万t、47年には300万tを超えたと予測されています。この規模の排出を続けるものではないと、同じような志のある事業者と関係を広げて連携していきたいですね。